

「やまゆり園では『問題行動が多いので働けない』⇒園を出ていまはフルタイムで。
ゆったりした口調で「楽しかったねー」「おつかれさま」と話すように。

毎日新聞 2021/2/21 【上東麻子/統合デジタル取材センター】
<https://mainichi.jp/articles/20210219/k00/00m/040/217000c> から抜粋

津久井やまゆり園（神奈川県）で障害がある入所者 19 人が殺害された事件後、利用者の一部が別の施設やグループホームに移った。吉田壱成（いっせい）さん（27）もその一人だ。事件後、家族が施設での虐待を疑い、行政に情報開示請求をするなど調査をしてきた。しかし、「密室」の壁は厚く、調査はなかなか進展しない。そんな中、壱成さんには大きな変化が生まれていた。

段ボールをリサイクルのためのラインに運ぶ壱成さん＝神奈川県大和市のおうち CO-OP リサイクルセンターで 2020 年 10 月 16 日、上東麻子撮影



原因不明のけがに不信感

2018年10月5日、美香さんが面会に行くと、吉成さんが右足を引きずり「痛い、痛い」と言いながら出てきた。職員に尋ねると「転んだか、他の利用者かだれかが踏みつけた可能性がある」と説明された。吉成さんは「(やまゆり園に)戻りたくない」と訴えた。病院で打撲と診断されたが、青いあざは足の根元から足先まで広範囲にわたり、腫れ上がっていた。

園の家族向けの手紙によると、吉成さんがいた6寮では10月1日から20日までに入所者のけがが計5件あり、うち1件は骨折だった。美香さんは園の説明があいまいだと感じたという。



ペットボトルをリサイクルのためのラインに入れる吉成さん＝神奈川県大和市のおうち CO-OP リサイクルセンターで 2020.10.16、上東麻子撮影

これまでも帰宅した後に園に戻るのを度々嫌がっていた。虐待が疑われる。2年前に足を骨折した時も原因が不明なままだった。別の法人の施設で保護してもらうことになり、その過程で、関係者が吉成さんの住所地である厚木市に虐待通報した。

園側は厚木市の聴取に、吉成さんがいた6寮は行動障害の人が多く、「トラブルが起きやすい」「原因不明のけががあるのは事実」と認める一方、「けがをした場合はどんな小さなことも家族に報告している」「虐待防止委員会を月1回開いている」などと説明。けがの原因は利用者同士のトラブルにより、「尻もちをついた」「居室内の危険箇所につづけた」などの可能性を伝えた。

結局、この件は虐待とは認定されなかった。

自治体の調査にも疑問

不可解なのは、厚木市障がい福祉課は通報の3日後、やまゆり園で関係者を聴取したが、その一方、吉成さん本人には一度も会わず、けがの状態も確認しなかった。さらに、その日のうちに「現段階では職員による虐待の事実は確認できない」と結論付けた。

虐待調査では、まず被害者の状態を確認することが基本だ。

この点を指摘された厚木市は、通報から9日後に職員を派遣し、吉成さんに面会した。厚木市の「虐待通報に係る対応経過について」報告書にはこう書かれている。

「本人の受傷の原因が不明であるにもかかわらず原因究明を行っていなかった点や、利用者間のトラブルを認知しながら再発防止策がとられていないことについては、支援方法として適切ではない部分があったと言わざるを得ない」

作業の合間に掃除も手伝う吉成さん(中央)＝神奈川県大和市のおうち CO-OP
リサイクルセンターで 2020 年 10 月 16 日、上東麻子撮影



その後、厚木市は津久井やまゆり園に改善指導を行った。厚木市障がい福祉課長は毎日新聞の取材に、虐待通報を受けた時の対応について「けがの場合はできる限り見せていただくのは当然必要。マニュアルでも状況確認しなさいとなっている」と認めた。その一方、吉成さんのけがの状況を確認する前に「虐待の事実は確認できない」と結論づけたことについては、「個別のケースについては答えられない」と回答を避けた。

美香さんが園に不信を感じた理由は他にもある。吉成さんは毎週帰宅していたが、迎えに行くたびにフケだらけでおしっこ臭かった。「刺激が苦手な人がいるため」として、吉成さんがいた6寮はユニットの入り口が施錠され、職員以外は親さえ入ることが許されなかった。

美香さんは「面会に行ってもほとんどの職員は、普段の様子を伝えてくれず、どんな支援をしているのか全く見えなかった」。それでも、「息子がお世話になっているという負い目もあり、園に意見できなかつた」と複雑な心情を吐露する。

やまゆり園の入倉かおる園長は毎日新聞の取材に、「けがをさせてしまったことは申し訳ない。ご家族に対してコミュニケーションが不足していました」と説明。吉成さんが他の法人に移ったことは、「ちょうど外に出ることを模索

していたタイミングだったのだと思います」と話し、美香さんの抱く不信には言及しなかった。

美香さんは「息子みたいな人の支援が難しいのは分かりますが、本人は何が起きたのか説明できません。虐待でなかったとしても本当の原因を知りたいし、丁寧に説明してほしい。何より真摯に謝罪してほしい」と話す。

壱成さんが今の施設に移ってから気づいたことがある。やまゆり園にいた頃は、帰宅した時に怒ったような口調で、「こらっ」「早くしろ!」と言い続けていた。それが今は、ゆったりした口調で「楽しかったねー」「おつかれさま」などと話すようになった。壱成さんは聞いた言葉をそのまま繰り返す特徴がある。美香さんは「職員が話す言葉が影響しているのでしょう」と推測する。

支援者（左）や職場の仲間とともに昼食をとる壱成さん＝神奈川県大和市のおうち CO-OP リサイクルセンターで 2020 年 10 月 16 日、上東麻子撮影

フルタイムで働けるなんて…

現在、壱成さんは週 5 日、神奈川県大和市のリサイクル施設「おうち CO-OP リサイクルセンター」で働き月数千円の収入を得ている。チラシや段ボールなどの古紙やペットボトルの仕分けをする力仕事を、支援者らと共に 1 日約 8 時間こなす。

センターは障害者約 10 人を雇用している。センター長の佐野浩二さんは壱成さんの働きぶりについて、「きちんとあいさつするし、楽しそうに働き、求めていることをやってくれる。重い障害があっても、支援者が適切なサポートをすれば働くことができます」と評価する。

美香さんは、壱成さんの変化に驚いている。「やまゆり園ではずっと『問題行動が多いので働けない』と言われ、何もできない子だと私も思い込んでいました。まさかフルタイムで働けるなんて……。今は壱成に合った専門的な支援を受けていると感じます。一体、何が違うのでしょうか」